

総合的人間力を育てる
サイクルプロジェクト
進捗報告

大阪樟蔭女子大学 川上正浩

本日のお話

1. キャリアとは。キャリア教育とは。
2. 取組の概要。
3. 今年度の取組。
4. 学生の変化。
5. 学生提案型インターンシップへ。

2

キャリアとは キャリア教育とは

3

本取組の背景

- 女性の社会進出の多様化が進む一方、自らの**目標**が**設定できない**学生が増加。
- 本学においても、そうした傾向が…。



4

そもそもキャリアとは

- 先を見据え、先につながることを見据え、「**今、何をすべきか**」を考えることが大切。
- 点と点をつなぐこと。点と点をつなぐ線がそれぞれの学生のキャリアとなる。

5

キャリア教育

- **人生**を考えさせること。
- 本学の卒業生の**進路**はさまざま。
- 自分の**人生を考える力**を身につけること。
- 人生を通じて役に立つ**知恵**を育てることが必要。

6

<資料2～6について>

本学人間科学部心理学科の川上と申します。本学のプロジェクト、サイクルプロジェクトという、名前をつけておりますけれども、このプロジェクトについて、ご説明をさせていただきたいと思っております。わたくしの方のお話は、このぐらいのプログラムになっております。まず、キャリアとは…というお話をさせていただきまして、その後、本学の取組の概要、そして、具体的な本年度の取組、そして、その上で、その取組を過ごした学生たちがどんな風に変化したというようなことをお話させていただいて、その後、学生提案型の

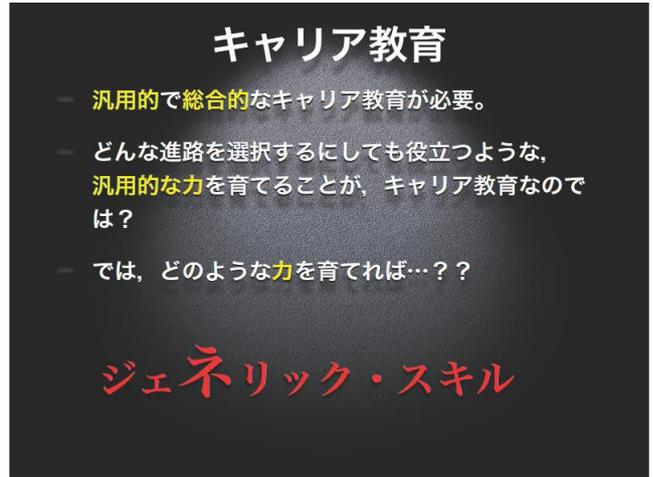
インターンシップの報告にうつらせていただこうと思っております。

まずキャリアとは、キャリア教育とはということに関する我々の考えについて、お話をさせていただきます。本取組、現代 GP でご支援いただいておりますけれども、この取り組みの背景には、どんなことがあるかと申しますと、まず女性の社会進出が多様化している一方で、多様化するが故にという言い方があるかもしれませんが、その自分の目標が、具体的に設定できない、そういう学生が増えております。本学も当然例外で

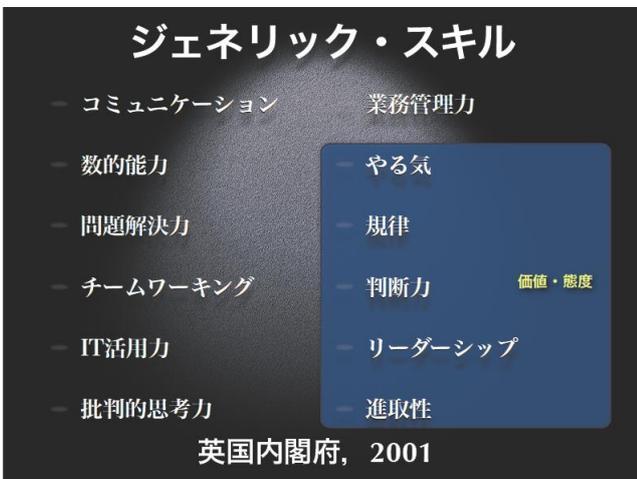
はありませんで、そうした傾向が、非常に強くなってきているというのが現状であります。そうした時に、彼女らのキャリアを支える際、そもそもキャリアとは何かということを考えてところから、我々はスタートいたしました。キャリアというのは先を見据え、先につながることを見据え、何かこう言葉的に変な感じに聞こえるかもしれませんが、要するに先を見るというのは、遠くを見る。遠い先を見るということと、同時にやはり足元もみないといけない。遠くを見るだけではなくて、足元もみなければいけない。つまり、先を見据えるだけではなくて、先につながるということがどういうことなのかということを見据えて、今何をすべきか。つまり、先ほど、足元という例えをさせていただきましたけれども、次の一步をどちらに向けて踏み出さないといけないのかということを見据える。それを考えることが非常に大事なことなのではないか。そして、次の一步がどこに行き、その次の一步がどこに行き、その次の一步がどこに行き、という一個一個の点を順番につないでいくことというのが、彼女たちのキャリアを形成すること、そして、その一步一步をつないで彼女らが歩いていった道のり、それをつないだ線そのものが、それぞれの彼女たちのキャリアになるんじゃないのか、というのが我々の考えです。そうした場合に、そのキャリア教育というのは、どういう風に捉えられるか先ほどの三川先生のお話にもありましたけれども、人生そのものを考えさせること、これがキャリアだというふうに考えられるわけです。そうやってきますと、さきほども申しましたように本学の卒業生、進路は様々でございます。そうした様々な進路に進んでいく彼女らの自分の人生を自分で考える力というのを身に付けてあげる。それが、我々がなすべきキャリア教育なのではないか。もう少し別の言い方をしますと、人生を通じて、役に立つような、つまり、今、次のタイミングでどこにどう就職するか、どういう企業にどう入っていくか、というようなことだけではなくて、彼女らが人生をまた立ち止まって考えようとした時に、今、4回生が終わって就職するという時にどうこうというだけではなくて、彼女らがどんな時にでも、自分の人生について立ち止まって考えなおそうとした時に、考えるだけの力というのを身に付けてあげるといふこと、その時に役に立つような知恵を身に付けてやること、それが、我々が大学の教育の中で、できるキャリア教育なのではないか、という風に考えました。



7



8



9

<資料7～9について>

それを具体的な取り組みとして、どんな風に考えていくかということなんですけれども、そうした点を踏まえて考えますと、そのキャリア教育というのは、たとえば、何かの就職に役立つような技能を身につけます、とか、何かの職業につながるスキルを身につけるというようなことではない。おそらく、もう少し汎用的で一般的で、どんな仕事についても使えるような、どんな進路に進んでも、役に立つような、そういうような力というものを育ててあげるといふこと。それに

よって、彼女ら自身が、どんな人生の岐路に立った時にでも、その力を利用でき、そして、自分の人生について、ちゃんと考えることができるような力。それを身につけさせてあげることが大事なのではないか、というように考えております。で、そうした時に、じゃあ具体的にはどういう力を育てればよいのか、というふうなことが非常に問題になってまいります。昨今、そうしたことについては、色々なところで色々なことが言われておりまして、社会人基礎力でありますとか、ベーシックスキルというような表現もあります。それから、総合的人間力なんていうこともいわれておりますけれども、我々は『ジェネリック・スキル』と呼ばれている力に着目をして、この力を本学の学生さんに身に付けて卒業していってもらおう考えました。ジェネリック・スキルというのはちょっと耳慣れない言葉かもしれませんが。ジェネリックというと、どうしても医薬品という言葉としか結びつかないので、なんかもう、期限の切れたスキルなんじゃないかという誤解をされることもあるんですけども、「ジェネリック」というのは、汎用的、一般的なという意味合いでありまして、たとえば、イギリスで言われている、『ジェネリック・スキル』なんていうのは、こういう力があげられています。たとえば「コミュニケーションの力」、それから「チームワークができるような能力」である。あるいは、これ、批判的思考力というふうに日本語では訳されますけれども、批判的といいますと、何かこう、人の上げ足を取るようなイメージがありますが、原語で申しますと「クリティカルシンキング」、つまり、与えられたものをうのみにしないで、それをきっちり立ち止まって考えて、判断するような力。こういう力などが、ジェネリック・スキルと呼ばれています。あちらの辺りですね、「やる気」「判断力」「リーダーシップ」なんてことになると、これは、スキル、技術というよりもある種の価値観であったりとか、ある種の態度であったりとかするんだということも、お気づきかと思えます。こうしたもの

を『ジェネリック・スキル』と呼んで、汎用的な力、どんな仕事に就くにしても必要になるし、且つ、役に立つような力だと言われているわけです。

本学が考えるジェネリック・スキル



10

本学が考えるジェネリック・スキル

以下の4つの力と再定義

- 『気づく』
- 『考えぬく』
- 『聴き・伝える』
- 『やり遂げる』

11

4つの力の循環



12

＜資料 10～12 について＞

本学でジェネリック・スキルというのはどんな風に考えるか、どんな力があれば、汎用的な力と言えるのか。汎用的な場面で使えるような力になるのか、ということを考えました。そして、2つ大きな柱、我々がジェネリック・スキルを考えていく上での2つの大きな柱を設定しました。一つは「課題を解決できる能力」。先ほども申しましたように、人生の岐路に立った時にそこには必ず問題解決というプロセスというのが入ってまいります。そうした場面で、課題を解決することができるような能力、これがジェネリック・スキル

である。そして、大学というのは、当然ですけれども、もともと専門的な色々な知識を学ぶための場です。ただ、学んだそういう専門的な知識を知識のままでは、どうも、宝の持ち腐れという言い方もありますけれども、本来、知識そのものは有益なものなだけけれども、それをうまく、社会の中で活かしていくことがなければ、それは、何を学んだことにもならない。なので、そういう大学で学んだ知識を、社会の中で活かしていくような、これはおそらく知恵という言い方がしっくりくるだろうということで、「知識を社会で活かす知恵」だというふうに考えています。この2つの柱をすえたうえで、我々はジェネリック・スキルをさらに4つの力だという風に再定義いたしました。一つは「気づく力」、もう一つは「考えぬく力」、三つ目が「聴き・伝える力」、そして最後が「やり遂げる力」の4つです。この4つの力と申しますのは、実は循環するという風に我々は考えています。つまり、何が問題であるか、どういうことを私は、あるいは我々は今、解決しなければいけないのか、ということにまず、気がつかないといけない。気がつくと、そのことについて、我々はそれを考えぬく必要が出てまいります。考えぬく過程の中でその考えを人に伝えたり、あるいは、他者から、あるいは色々な文献から、情報を集めたり、というような形で情報を聞き、そしてそれを伝える。そうした上で、何かをやり

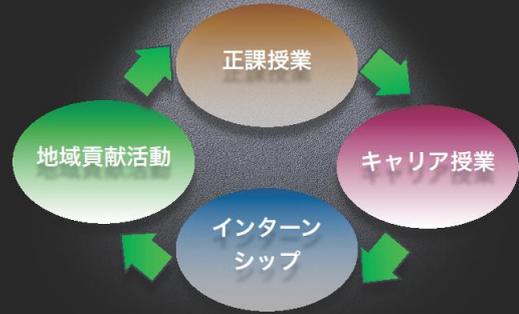
遂げることができるわけですが、何かをやり遂げると、我々はもう一つ上のステージに立っておりますので、当然、見る視点が変わりますので、見えている所が変わり、また、新たなところに、新たな問題に、新たな課題に、といてもいいですが、「気づいて」また、というような形で、この循環する4つの力なのだという風に考えることができるわけです。

力をどのように育てるか？

- 汎用的なスキルであるので、**広く、様々な場で**育てることが可能。
- そうすることで、**真に汎用的なスキル**になりうる。

13

力を育てる4つの機会



14

どのように育てるか？

- やはり、**正課授業**において、**が中心**。

本学が考える4つの力は、**正課の授業を支える力**そのものである。

15

どのように育てるか？

卒業後をも射程に入れた**キャリア教育**であると同時に、**正課授業のための教育**でもある。

気づく力 考えぬく力 聴き・伝える力 やり遂げる力

16

サイクルプロジェクト

Shoin
Integrated - Project
Career
Leading
Education

17

<資料 13~17 について>

こうした4つの力を、どんな風に育てていけばいいのか、ということなんですけれども、当然これは、そもそも汎用的なスキルだと申しているわけでありますから、汎用的な場面、広く様々な場面で育てることが可能になるはず。さらに言えば、そういう様々な場面で育てることによって、真の汎用的な力が育成されるのだと考えられます。大学の教育の中であるいは、大学の教育を中心としてという言い方になるかもしれませんが、そういう力を育てる場面として、4つの場面を我々は想定しています。一つは「正課授業」、

これはいわゆる大学の一般的な意味での授業と呼ばれるものです。そして、キャリア教育を考えるうえで当然出てくる発想なんですけれども、キャリア教育に特化した授業としての、「キャリア授業」というもの。そして、今日学生さんたちのお話のメインになってまいりますけれども、「インターンシップ」という、学校から外に出て、企業の中に飛び出して、そこで学んでくる。そういうような機会。そして、最後に「地域貢献活動」というように申しましたけれども、これは、ボランティアの活動ですとか、あるいは場合によっては、地域に貢献しているのかは難しいかもしれませんが、アルバイトなんかの活動の中でも彼女らはそういう力を色々と伸ばしてくれますので、こういう場面も含めて、地域貢献活動。つまり、大学外の、大学がコントロールしない場面の活動。これも含めて、4つの場面として、想定をしております。これも大学の授業はやはり正課授業が中心ですので、正課授業からスタートしまして、そこで培った力をもとにして、キャリア授業、そして社会のことを知った上で、具体的な社会の場面に出て行って、さらに、それを踏まえてより広い、大学の行ってみれば、紐つきでない、外の場面に出て行って、そこで学んでくる。力をつけてくる。そしてその力をつけたことによって、さらにそのことが正課授業に生きてというような形の循環が起こるのではないか、という風に考えております。こうした4つの機会をつかうというのが、我々のプロジェクトの考えなんですけれども、大学の中心というのは、やはり正課授業ですので、彼女らの力を育てるという文脈においても、やはり正課授業を中心にしていく必要があるだろう。正課授業を中心にしていくことで、最も効率的に彼女たちの力を育てられるのではないかと考えています。これは、大学の中で正課授業が一番多いとか、一番中心だ、ということと同時にもう一つ非常に大きな意味があって、それは何かと申しますと、要するにこの4つの力というのは、授業を支える力そのものなんだということです。教員がだいたい集まりますと、色々と授業とか何とかの愚痴になることが多いんですけれども、そうした時に教員が一番愚痴を言うのはどういった場面かということ、学生が「気づいてくれない」、学生が「考えぬいてくれない」、学生がちゃんと「聴いてくれない」、学生がちゃんと「伝えてくれない」、学生が「やり遂げてくれない」そういう愚痴が教員としては、一番多い愚痴なわけです。つまり、逆に申せば、学生にそういう力がついてくれば、我々の授業は、より楽しいものに、我々にとっても非常に楽しいものになりますし、非常に実り豊かなものになる。なので、今、学生さんに対して、こういう力を育てることが必要ですよ、というような事を偉そうに申しておりますけれども、実は、学生さんにこういう力がついてくれば、一番喜ばしいのは、我々教員なのではないか、という風に私は思うわけです。なので、授業の中で、そういう力を育てますと、気づく力がアップする、考えぬく力がアップする、聴き伝える力がアップする、やり遂げる力がアップする、というようなことによって、それは、学生さんのキャリア、卒業や就職、そしてその先を踏まえたキャリア教育であると同時に、まさに正課授業のための教育でもある、ということが言えると思います。これも、学生さんの力がついてくると、我々、授業がよくなって、授業がよくなってくれば、当然ですけれども、学生さんに力が付きやすくなって、学生さんの力がつけば、という形の、よい循環、こういう風に、このプロジェクトでは、『循環』ということ 키워ドにしておりますので、プロジェクトとしては『サイクルプロジェクト』というふうに呼んでおります。これは実は、なぜサイクルプロジェクトというのかといいますと、その循環ともう一つ意味がありまして、Shoin Integrated Career Leading Education 統合的なキャリアを導いていくような教育をやっていくんだ、ということで、その頭の文字をとりまして、時々、綴りが間違ってますよとお叱りをうけたりするんですけれども、『SICLE-Project』という風に名前をつけて、取り組んでいるということでございます。



18

正課授業における取組

- 原則的に、専任教員の担当する基本的にすべての科目について、ジェネリック・スキル教育に関して目指すところを学生に呈示。
- 気づく力、考えぬく力、聴き・伝える力、やり遂げる力のそれぞれについて、その授業で「どの程度教育に力を入れるか」を5段階で評定、これを冊子として学生に配付。

19

インターンシップにおける取組

学生提案型インターンシップの実施

- ジェネリック・スキル教育実践の場としてのインターンシップ。
- 企業との産学連携により、商品企画など企業のニーズ・課題に対して、学生が、学生ならではの、女性ならではの、の視点を生かした提案をまとめあげる。

20

学生提案型インターンシップ

実習先	与えられたテーマ	学生数
雑貨卸	20~30代女性向けの生活雑貨の企画	14名
アパレルメーカー	秋冬に売れそうなアウター（コートなど）と小物について	12名
洋菓子メーカー	2008年度クリスマスケーキの提案	13名
飲料メーカー	乳飲料または清涼飲料水の商品開発	6名
化粧品メーカー	10年後の美容室におけるアロマ商品の販売について	12名

21

<資料 18~21 について>

具体的に今年度、どんな取り組みをしたのか、ということなんですけれども、正課授業においては、一昨年、スタートした折には、非常に弱くてですね、20いくつかの授業の中でそういう力を育てていきますよという事を宣言しただけだったんですけれども、今年度に関しましては、原則的に、専任教員の担当するすべての科目について、ジェネリック・スキルを育てるという事に関して、どんな所を目指しているか、ということをして学生に提示いたしました。具体的には、その「気づく力」「考えぬく力」「聴き・伝える力」「やり遂げる力」という4つの力、それぞれについて、5段階の評定で、この科目では気づく力を育てるところに5段階で4ぐらいの力を注ぎます、とか、この授業では聴き伝えるという授業にはあまり力を注がないので、5段階でいうと、2です、とかというような形で、それぞれの力について、5段階評定にしたものを冊子にして、すべての学生に配布いたしました。これによって、教員の側がこういう力を育てるんだ、授業の中でこれは、いわゆるペタゴジーの部分に当たるかと思うんですけれども、やり口によって、授業の対象としている内容を伝える際に、彼女らの気づく力をできるだけ促進するような、あるいは聴き伝える力をできるだけ促進するような授業の運営をすることになりまして、授業で伝えたい知識の内容を変えるというのではなくて、その伝え方、あるいは、授業の運営の仕方を工夫することによって、彼女たちのこういう力を育てていきたいという思いがあります。これによって、色々な授業で、彼女らは力を磨かれるわけなんですけれども、それと同時に非常に大きいのが、インターンシップにおける取組です。特に、従来の、いわゆる従来型のインターンシップというのは、企業でお仕事を体験させていただく、つまり、大学の側から見れば、よろしく願います、とお願いをし

て、学生を『投げ』て学生はその向こうの企業さんに「じゃあ、これをやって」とか、「じゃあこの仕事をやって」とかというような形で、企業に、言ってみれば『お任せ型』のインターンシップが多かったと思います。今回、本学が取り組んだインターンシップというのは、「学生提案型インターンシップ」という風に申しまして、これは、インターンシップの場も当然ですけれども、ジェネリック・スキル教育の実践の場であるということ強く意識して、企業さんと言ってみれば産学連携ということになると思いますけれども、商品企画に代表されるような、企業として、これをやってほしいということ、提示いただいて、それについて、学生がその回答を模索して提案する、そういうインターンシップを計画いたしました。これは、学生の強みという言い方になるかもしれませんが、学生らしさ、あるいは、本学は女子大ですから、女性らしさという言い方になるかもしれませんが、学生ならではの、そして女性ならではの視点を活かして、企業さんが求めておられる何らかのニーズに対して答えていくというような形、つまり、うまくいけば、学生さんにとっても成長の機会になるし、企業さんにとってもメリットのあるような形、これが理想的な形だと思うんですけれども、こういう形でインターンシップを運営していきたいと考えたわけです。実際、今年度、行わせていただいた学生提案型のインターンシップですけれども、だいたいこのぐらいの会社（資料 21）、少し小さくて見にくいかもしれませんが、雑貨卸の業者さんに行きまして、14名の学生が行ってますけれども、20代から30代の女性向けの生活雑貨を企画する、というテーマを、与えられております。あるいは、アパレルメーカーさんに出向きまして、この秋冬に売れそうなアウター・コート、とかジャケットとかですけれども、と、小物についてこれも新商品を企画するというようなこと、あるいは、洋菓子メーカーさんに出向きまして、もう時期が終わってしまったんですけれども、2008年度のクリスマスケーキを提案するというので、2種類のクリスマス限定のケーキ、チーズケーキですけれども、提案させていただいております。あるいは、飲料メーカーさんに出向きまして、乳飲料、または、清涼飲料水の新しい商品開発。そして、最後化粧品のメーカーさんですけれども、今すぐ商品化という話ではなくて、10年後の美容室におけるアロマ商品の販売がどうなるかということを考えて、10年後を見据えた提案をください。なんかタイムカプセル的ですが、10年後を見据えた企画を提案するなんて風なテーマをいただいております。具体的にこの中で雑貨卸の企業さん、それから、飲料メーカーの企業さんに行った学生さんからは、このあと具体的な内容について、報告があると思いますので、お楽しみにしていただきたいと思います。

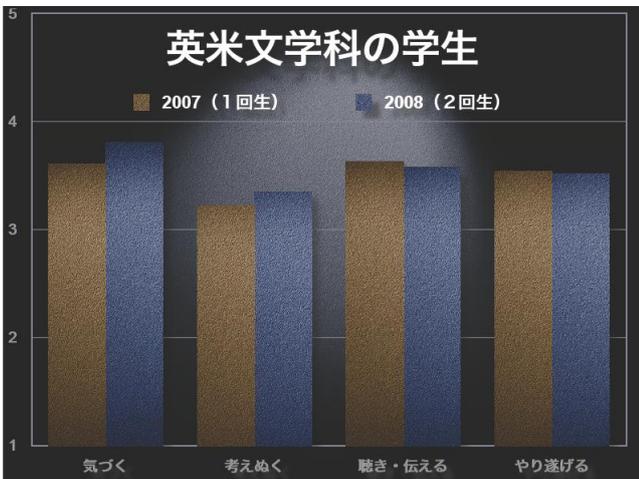


22

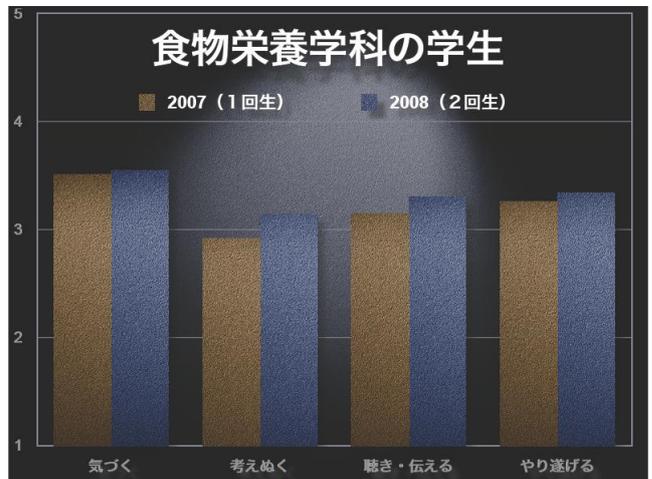
ジェネリック・スキル自己評価

- 20個の評価項目によって学生は自己評価。
- Webポートフォリオ上で自己評価、教員とコミュニケーション、自己評価の蓄積。

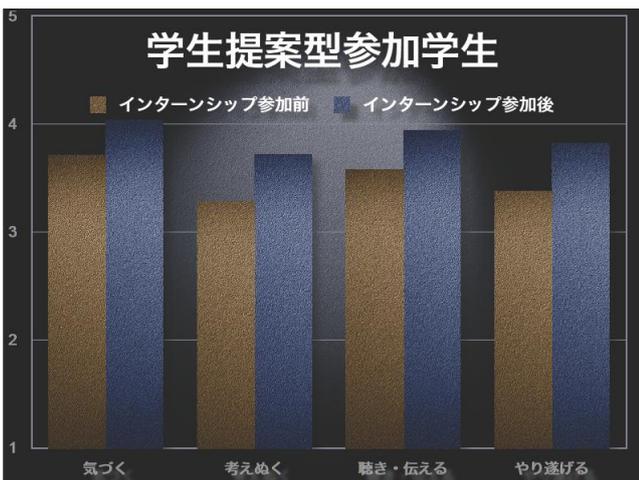
23



24



25



26

<資料 22~26 について>

この後、学生さんの具体的な変化ということについて、話をさせていただきたいのですが、変化と申しますのは、彼女たちがジェネリック・スキルに関して、自己評価の機会を設けています。これは、Webポートフォリオという本学の開発中のシステムを使ってやっておるんですけども、今のところまだ十分な機能が装備されているわけではなくて、現状でできることのひとつにジェネリック・スキルの自己評価というのがあります。これは、4つのジェネリック・スキル。気づく力、考えぬく力、聴き伝える力、やり

遂げる力、という4つの力に対しまして、それぞれ5項目の質問項目、たとえば、「他者の立場にたって考えぬくことができる」とか色々な具体的な細かい項目、5つずつの項目からなる20個の自己評価項目というのがございます。この20個の自己評価項目に対しまして、自分で今の段階では、5段階のいくつぐらいかということをして5段階評定をするわけですが、ここで自己評価をしたものは、実は、アドバイザーの所にその集計が送られまして、先ほど三川先生からのご紹介でもありましたけれども、こういうWebポートフォリオ

は、学生さんが自己評価をただするだけではなくて、それによって、教員とコミュニケーションをとって、その上で、教員は適切なアドバイスをする機会を得、また、それによって、学生さんの方はアドバイスを得る機会を得る。また、同時にコミュニケーションが、より円滑に進むようになるという風な機能を持たせたWeb上のシステムでございます。さらに、ポートフォリオですから、学生さん自身の自己評価については、順次蓄積されていきますので、以前、たとえば4回生の学生であれば、1回生の時にはこのくらいだったけれども、2回生でこうなって、3回生では少し伸び悩んだけれども、4回生でまた少し伸びたなんてことを、自分で振り返れるように、なっております。実際に本学のGPで現在試行学科として動いておりますのが、2学科、あります。一つは英米文学科、それからもう一つは食物栄養学科、の2つの学科ですけれども、それぞれの学生さんの伸びについて、今年度の成果として、お示ししたいと思うんですけれども、英米文学科さんの場合にはですね、「気づく力」、それから「考えぬく力」に関しては伸びておる、というような状況、「聴き伝える力」と「やり遂げる力」に関しては、横ばいというふうな状況であります。食物栄養学科さんのデータですけれども、これに関しましては、「考えぬく力」「聴き伝える力」というのが伸びております。そういうような事が見えております。そして、今日一番お示ししたいというか、ハードルを上げることになるのかもしれませんが、一番お示ししたいのが、実は、さきほどから申しております学生提案型インターンシップ、このインターンシップに参加してくれた学生がインターンシップに出向く前と、それから出向いた後で、どんな風になってるかというのを見ていただくのがこれです。すべての力において、自己評価だという事は割り引いていただきたいのですが、非常に大きく伸びているということがわかっていただけたと思います。つまり、彼女らは少なくともそういう機会に参加することによって、非常に大きな自信を得たということでもあります。もちろん、その自信は、荒唐無稽の自信なのではなくて、彼女らがそれぞれが色々な経験をしてきて、その経験の中で得てきた自信だということは非常に大きな事なのではないかというふうに思っております。そうした学生提案型のインターンシップなんですけれども、この、インターンシップについて、私が色々とお話をするのもあれですので、これから先は、学生さん自身の体験について、学生さん自身の声でお聞きいただきたいと思います。